

## 2023年度「漢方医学教育研究助成」採択者一覧

一般研究助成：5件/9件			
No.	研究題目	施設名・所属（役職）	申請者（代表）
1	漢方薬の生理機能を理解するための基礎研究室配属実習の構築	秋田大学大学院医学系研究科 医学専攻 器官・統合生理学講座 教授	沼田 朋大
	医学部学生への漢方医学教育を促進するため、基礎研究室配属期間に漢方薬の生理機能を科学的に体験できる実習プログラムを開発する。各学生は水分調節に関わる漢方薬の選別を行い、その成分や作用メカニズムに関する知識を学ぶ。次に細胞サイズや細胞死解析で水分出入作用を評価し、実験を通じて効果を検証する。最終的に、学び体験した内容を学内外で発表することで、研究マインドを涵養する。また、発表では、漢方薬の処方方法や適応疾患について紹介することで、臨床的な視点から漢方薬の使用への理解を深める。このプログラムは学生が漢方医学における実践的な知識と研究スキルを獲得し、生涯学習につながる基盤を築くことを目指す。		
2	漢方医学的な問診トレーニング用チャットボットの開発と応用	東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授	野上 達也
	漢方医学の教育において、漢方医学的な診察に必要な知識と技術を学習することは非常に重要である。漢方医学的な診察として望診、問診、問診、切診の四診が行われるが、中でも問診は患者の訴えを傾聴し、漢方医学的な診断に至るための情報を収集する重要なプロセスである。しかしながら、医学生や研修医が漢方医学的な診察を求める患者に対して問診を行う機会は非常に乏しく、漢方医学的診療の実践的なトレーニングを行う上で障壁となっている。そこで今回我々は近年進歩の著しい人工知能技術を用いた「漢方医学的治療を求める模擬患者」の役割を担うチャットボット（自動会話プログラム）を作成し、漢方医学教育に応用し、その教育効果を検証することとした。		
3	漢方医学授業を効率よく学ぶための予習動画製作の試み	日本歯科大学附属病院内科 臨床教授	矢久保 修嗣
	コロナウイルス感染症対策としてオンライン授業が行われ、スマートフォンなどを使用して学生は授業を受けることに習熟してきている。このシステムを使用して、これから受講するオンサイトの漢方医学の授業に関して、チーム基盤型学習法(TBL)や、課題解決型学習(PBL)、シミュレーションなどの授業手法に関する授業前の説明や、学生が興味を惹起し、講義の中でどこが重要事項なのかを理解できるような3分程度の授業予習動画の製作を考えた。学生はこれをWEBからオンラインで授業前に視聴してから、漢方医学の授業に向かうことができる。授業前に短時間の予習動画を視聴する学習システムは、今後の医学教育の分野では有効な手段となることが期待される。		
4	漢方学習のためのボードゲーム（Kampoker）開発	三重大学医学部附属病院 漢方医学センター センター長（病院准教授）	高村 光幸
	漢方医学教育において、初学者では漢方処方名が難解で覚えにくい、構成生薬も複雑で、どのような点に留意が必要か記憶しにくいなどという声がよく聞かれる。中級者でも、構成生薬を失念したり、基原植物名称や使用部位などを誤認したりしてしまうこともある。一方、ポーカーや麻雀の役など、ゲームの要素のように繰り返し触れるものに関しては、難解な名称や特性であっても容易に記憶可能なことは周知である。学生や研修医が短時間で気軽に反復使用でき、漢方処方名やその特性、構成生薬などを要素に用いて教材として使えるボードゲームを開発し、さらに英語版、中国版へと発展させ、グローバルに活躍できる研究者を育成する一助としたい。		
5	総合内科診療における臨床推論に 漢方薬の運用を組み込んだ卒業研修システムの構築	埼玉医科大学 総合診療内科 東洋医学科兼任 教授	鈴木 朋子
	漢方医学教育研究では、卒業教育に比べ卒業教育には確立されたカリキュラムが存在しない。近年開発が進んでいる漢方卒業教育では、一般的に漢方医学単独で教える教材がメインであるため、学修は研修医の興味によるところが大きく、漢方医学の特色を活かす運用が広く浸透しているとはいえない。日本の伝統医学である漢方を現代医学に十分かつ確に取り入れるため、現代医学的臨床推論の中に漢方医学を学ぶツールを組み込むことが本研究の目的・特徴である。現代医学の中で漢方医学の概念を活かしながら、病名処方に終始することなく、外来診療からHCU管理にまで漢方薬を的確に運用する「病院漢方」の実践を目指すものである。		

グループ研究助成：2件/3件			
No.	研究題目	施設名・所属（役職）	申請者（代表）
1	漢方医学的問診バーチャル患者の開発と医学生の学修効果の検証	富山大学学術研究部医学系成人看護学Ⅰ講座 准教授	山田 理絵
	患者の主観的な多岐にわたる訴えの丹念な聴取を基本とする漢方医学的問診において、患者の体験を患者の視点に立ち理解するという共感 <sup>①</sup> は重要である。近年COVID-19の影響により、漢方臨床実習で医学生が対面で問診を行う機会は減少した。そのため、医学生が安全な学習環境で、いつでも反復練習ができ、かつ共感しながら漢方医学的病態を理解できる問診教材の開発は喫緊の課題である。本研究の目的は①漢方医学的問診で、医学生の共感や漢方医学的病態の理解を深める人工知能を搭載したバーチャル患者を開発し、②医学生をバーチャル患者に問診を行う群と模擬患者に問診を行う群に無作為に割り付け、漢方医学的問診バーチャル患者の検証を行うこととした。		
2	VR(virtual reality)及びMR(mixed reality)を用いた 漢方医学OSCE教材及び学修教材の開発	東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 臨床医学教育開発学 教授	山脇 正永
	漢方医学の臨床教育・研修は指導医の不足、実習・研修施設の不足などにより、教育・学修環境が十分とは言えない。さらに、学生及び研修医の漢方医学に関する臨床能力（コンピテンス）の到達度評価について検討された報告はほとんどない。本研究は、この課題を解決するために、近年医学教育で活用されつつあるvirtual reality(VR)、mixed reality(MR)を用いて、客観的臨床能力試験(OSCE)教材及び学修教材を開発し、オンデマンドで使用できる漢方医学の学修コンテンツを作成し、さらに学生及び研修医の臨床能力評価方法を確立しようというものである。		